

河原町埋蔵文化財調査報告書 第15集

鳥取県
河原町内遺跡発掘調査報告書

2003. 3

河原町教育委員会

序

この報告書は、鳥取中核工業団地（仮称）整備事業及び一般県道河原インター線整備事業に伴い、開発区域内にある古墳等の試掘調査として、平成14年度に国庫補助金を受けて実施した埋蔵文化財調査の記録であります。鳥取中核工業団地（仮称）事業に伴う埋蔵文化財調査は平成13年度に引き続いての調査です。

両事業は中国横断自動車道・姫路鳥取線の関連事業として進められています。鳥取中核工業団地（仮称）は、鳥取県が姫鳥線の開通を踏まえて、主に関西圏の県外企業からの企業誘致のための受け皿として中小企業総合事業団と共同で、本町高福、山手地区にまたがる丘陵地に工業団地の整備を進めているものです。また、一般県道河原インター線整備事業は、平成18年度の完成を目指している姫鳥線の河原インターチェンジへのアクセス道であり、国道29号と国道53号を結び、高速道路網を補完する幹線道路として鳥取県が整備します。

しかしながら、小泉内閣の構造改革の影響により、高速道路の建設主体である日本道路公団の民営化方針が示され、平成14年12月6日に提出された「道路関係四公団民営化推進委員会」最終報告では、約40兆円に膨らんだ債務を国民負担ができるだけ少なくなるよう返済するため、必要性の乏しい道路を造らない仕組みを考慮するという趣旨で、日本全国を5つの地域に分割して民営化会社を設立し、高速道路の新規建設については、民営化会社が自社の経営状況、投資採算性などにに基づき判断、自主的に決定するという報告がなされました。

その後、採算の取れない新規高速道路の整備について、国と地方が建設費用を負担する「新直轄方式」が打ち出され、本年6月には方針が決定するといわれています。

厳しい状況となっておりますが、鳥取県民にとって悲願である姫鳥線早期開通を目指して、周辺の整備を進めておく必要があります。

河原町は古事記所載の八上姫のふるさとであり、町内には延喜式神名帳に記された式内社が5社現存するなど、太古から開けてきた私たちの誇りうる郷土です。「豊かな心で自然と歴史が調和した活力ある町」をキャッチフレーズに、我が町の歴史や有形、無形の文化財を大切に後世へ伝えるため町民への啓発を進めながら、近年増えてきた開発事業との調整を図りつつ、埋蔵文化財調査を実施しています。

河原町としても、大規模な工業団地と幹線道路開発を町政の重要課題ととらえ、調整のために実施した今回の埋蔵文化財発掘調査でしたが、結果としては新たに1基の古墳と1箇所の遺物散布地を発見するなど、本町の歴史を解き明かしていくための貴重な資料を得ることができたと考えています。

この調査に際しましては、用地関係者、作業従事者等関係各位の格別なご理解とご協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。また、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの適切なご指導、ご助言をいただきながら調査を無事に終了し、本報告書が発刊できましたことに深甚なる感謝を申し上げます。

本報告書が、郷土理解と今後の調査研究の一助になれば幸いです。

2003年3月

河原町教育委員会

教育長 田 渕 暉 夫

例 言

1. 本報告書は、鳥取中核工業団地（仮称）整備事業及び一般県道河原インター線整備事業に伴い、平成14年度に国庫補助、県補助を受けて実施した試掘調査の記録である。
2. 本報告書は調査員中道が執筆、編集した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は河原町教育委員会で作成した。
3. 本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海拔高である。
4. 本報告書における記号は、トレンチをT、遺物をPoとする。
5. この調査による遺物に記載したネームは、高福7号墳は「TF7」、山手散布地は「山手散」とした。
6. 図版中、■は土器棺への粘土による目張りを表す。
7. 発掘調査で得られた記録類、出土遺物等は河原町教育委員会に保管する。
8. 調査関係者は次のとおりである。

調査団長	田 淵 暉 夫（河原町教育委員会教育長）
調査員	中 道 秀 俊
事務局	小 泉 悦 則（河原町教育委員会教育課長） 中 道 秀 俊（河原町教育委員会社会教育係長）
調査協力	ふくわだ 福和田部落 とくよし 徳吉部落 やまて 山手部落 かみやまて 上山手部落 ごうばら 郷原部落 いまざいけ 今在家部落 かがせ 加賀瀬部落
調査指導	鳥取県教育委員会事務局文化課 鳥取県埋蔵文化財センター
発掘作業員	池長よね子 中道 育子 西田カズエ 林 鶴子 森田 輝子 下田茂登子 川嶋 彰 八田 星代

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	5
第1節 調査の概要	5
第2節 トレンチ調査状況	6
1 山手古墳群周辺	6
2 高福古墳群周辺	6
第4章 まとめ	12

図版

報告書抄録

挿図目次

挿図1 周辺遺跡分布図	3
挿図2 調査区位置図	5
挿図3 山手古墳群・高福古墳群周辺トレンチ配置図	8
挿図4 高福古墳群TJ—1土器棺	9
挿図5 山手古墳群TH—3 竪穴住居跡	10
挿図6 山手古墳群TH—2ピット	11
挿図7 山手古墳群TE—7 南壁土層断面図及び平面図	11
挿図8 出土遺物実測図	14

挿表目次

挿表1 山手古墳群・高福古墳群周辺トレンチ一覧表	7
挿表2 出土遺物観察表	13

図版目次

図版1	TG—1 完掘状況
	TG—2 完掘状況
	TG—3 完掘状況
	TG—4 完掘状況
	TG—5 完掘状況
	TG—6 完掘状況
	TG—7 完掘状況
	TE—7 完掘状況
図版2	TH—1 完掘状況
	TH—2 完掘状況
	TH—3 完掘状況
	TK—1 完掘状況
	TJ—1 土器棺出土状況
	TJ—1 完掘状況
図版3	出土遺物(1)
図版4	出土遺物(2)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

鳥取中核工業団地（仮称）は、河原町山手及び高福地区にまたがる丘陵地に計画された事業面積62ヘクタールに及ぶ工業団地で、鳥取県と中小企業総合事業団が共同で開発推進しているものである。

鳥取県は県東部の工業団地に十分な敷地が残っていないこと、また鳥取市に偏った地域産業集積の多様化を図るため、中国横断自動車道姫路鳥取線の開通をにらんで工業団地の開発を積極的に進めることとし、2008年春に完成させ、分譲開始する予定であった。

当初は平成10年度、中小企業総合事業団の前身である地域振興整備公団が実施した開発可能性予備調査で、この地域が開発適地として認められたことから、鳥取県が地域振興整備公団に開発可能性調査を要請し、平成12～13年度に公団が開発区域の調査を行っており、事業採択されれば平成15年度に一部着工予定であった。

河原町では、平成13年度に国庫補助と県補助を受けて河原町内遺跡発掘調査等事業を実施し、11基の古墳を確認しているが、開発予定区域が62ヘクタールと広大で全区域を調査できなかつたため、引き続き平成14年度も国庫補助と県補助を受けて試掘調査を実施することとしていた。

しかし、小泉内閣の構造改革の影響により、日本道路公団民営化方針が示されて中国横断自動車道姫路鳥取線の開通が不透明となり、合わせて地域振興整備公団自体も中小企業総合事業団という独立法人となって事業の一部が吸収されたことで、鳥取中核工業団地（仮称）の事業採択は、高速道路や企業動向等に左右され、中小企業総合事業団の判断待ちとなった。

以上のような事情により、開発か否かの判断が示されるまで相当な時間を要すると考えられるが、河原町では、貴重な古墳群等を保護していくためにも、開発方針時の本調査にいつでも入れるようよう準備しておく必要があり、平成14年5月29日（水）、鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事の現地指導を受けて試掘調査位置を確認し、平成14年12月10日（火）から調査を開始した。

また、一般県道河原インター線は、本町大字高福の国道53号と郡家町大字西御門の国道29号を結ぶ、中国横断自動車道姫路鳥取線河原インターチェンジへのアクセス道路として計画されている幹線道路である。本町側から着工し、平成19年3月までの1期工事では船岡町大字下町までの区間の完成が見込まれているが、鳥取県政の重点施策である高速道路周辺整備として平成15年度着工見込みとなったことで、平成15年1月28日（火）、河原インター線予定ルートを踏査してトレンチ位置を確認し、2月7日（金）、河原町役場において鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、八頭地方県土整備局、河原町建設課及び河原町教育委員会が協議し、開発スケジュール等を確認した。

その結果、平成15年度工事区間の試掘調査を平成14年度中に実施することとし、鳥取中核工業団地（仮称）と合わせて試掘調査を実施したものである。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

河原町は鳥取県東部のほぼ中央部に位置する。東は八頭郡郡家町、船岡町、西は気高郡鹿野町、東伯郡三朝町、南は八頭郡用瀬町、佐治村、北は鳥取市に隣接している。

中国山地に源を發し、日本海へと注ぐ鳥取県三大河川の一つ、千代川が町中心部を縦断している。古くからの川の町であり、飲み水、魚介類、米づくりなど、人々は千代川を生活のよりどころとしてきた。片山遺跡など町内の遺跡では、土錘の出土が見られ、古くから漁業が行われていたことを示している。また、千代川の水勢は急で水量が少ないため水運には適した川ではないが、高瀬舟や、いかだ流しなどで、古くから水運が行われてきた。

しかし、川がもたらすものは恩恵ばかりではない。八頭郡内のすべての町村から流れ出た川が河原町で一つになる。八頭郡東部を流れる八東川が町北部で千代川に合流しており、集中豪雨時の洪水で苦しめられてきた。1593年(文禄2年)8月の洪水は、千代川の東岸にあった袋河原が西岸に移った(水路がかわった)ほどの大洪水であったという。この洪水は、太閤秀吉が高麗征伐中であったことから「高麗水」といわれている。その後も、幾度となく訪れる洪水と闘いながら人々は暮らしてきたが、昭和9年から昭和32年までにわたる千代川改修工事で、ようやく安眠できるようになった。

陸上交通については、古く鳥取から河原・智頭を通り、志戸坂峠を越え、山陽道を経て大阪・京都に至る上方往来があった。鳥取藩の参勤交代のルートにも利用された重要な街道であり、当時の河原村は旅人の休憩所である茶屋があったことから「上の茶屋」と呼ばれていた。現在は、鳥取市と山陽地方を結ぶ国道53号がほぼ千代川に沿って南北に走っているが、町中心部の交通渋滞緩和のために造られた国道53号河原道路が平成13年に供用開始され、町中心部の交通量が大幅に減った。交通安全を推進する上では良い環境になったといえるが、商店街の売上が減少するなど、マイナス面もあり、今後の町の活性化が急がれている。

また、中国横断自動車道姫路鳥取線のうちの鳥取～佐用間が、平成19年に全線開通予定で進められていたが、事業者である道路公団の民営化方針が示され、採算の取れない新規高速道路については、開通が大幅に遅れるおそれが出てきた。しかし、河原インターチェンジ設置に伴う「道の駅」構想も具体化しており、高速道路の建設に対して町民の期待は大きく、早期完成が待たれる。

なお、平成16年10月1日を期して、河原町を含む鳥取市周辺8町村(河原町、用瀬町、佐治村、国府町、福部村、鹿野町、気高町、青谷町)は鳥取市へ編入合併されることになっている。

第2節 歴史的環境

いつのころから河原町域に人が住むようになったのであろうか。縄文・弥生文化に関する河原町内での遺物出土例は少なく、その全容は明らかになっていない。

縄文時代に関するものとしては、郷原地区の前田遺跡から三本沈線すりいしで文様を構成する縄文土器が1片と、釜口地区の下中溝遺跡から細片であるが縄文土器を出土している。また、下中溝遺跡からは、縄文時代後期から弥生時代中期にかけて使用されたと思われる定角式磨製石斧も1点出土している。昭和32年には小畑地区で、よく使いこまれた縄文時代の磨石と石皿が地下約30センチ地点で出土している。

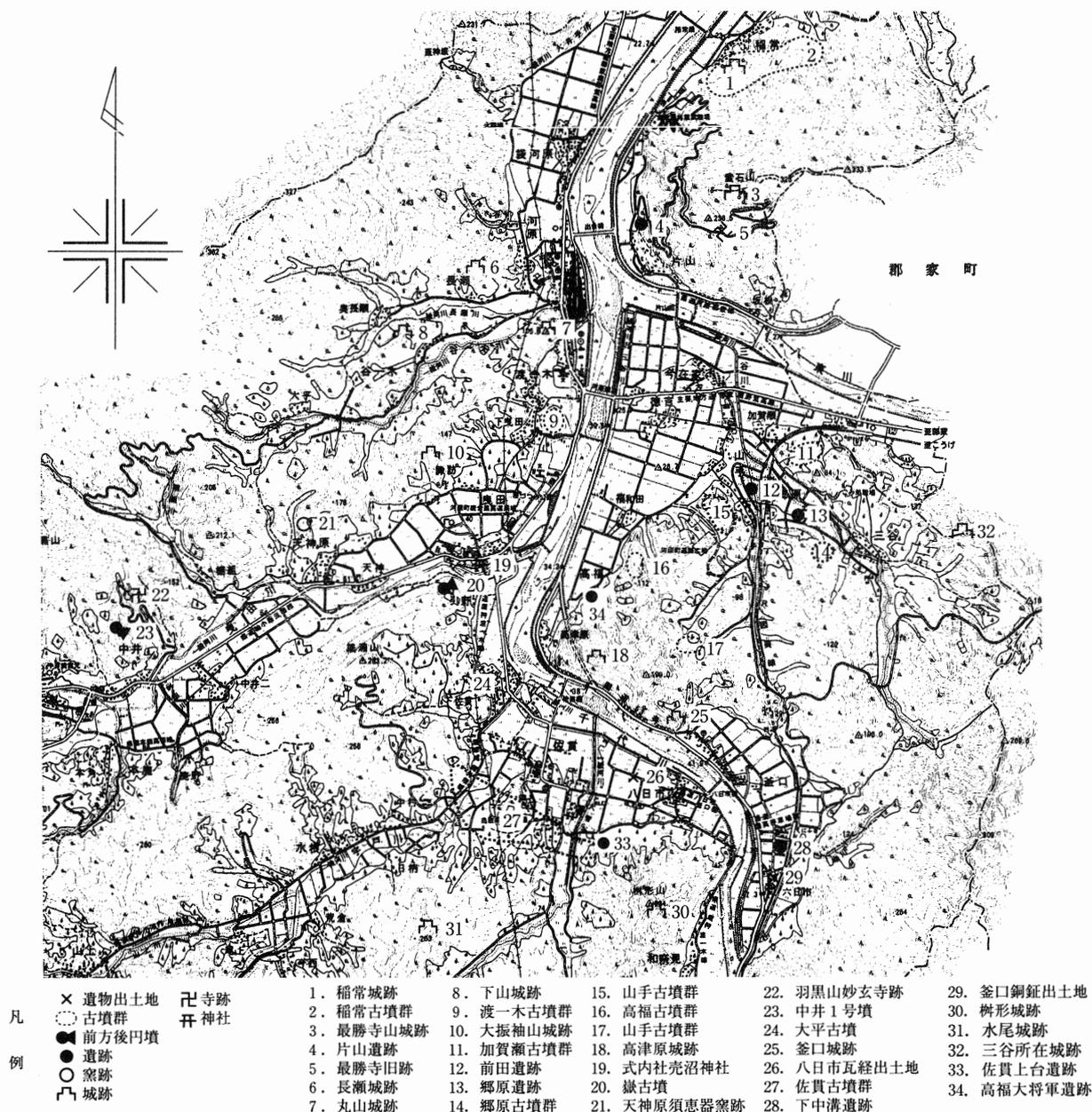
弥生時代に関するものとしては、前田遺跡から弥生土器が5点と、遺物散布地である今在家の上土居遺跡から弥生中期の土器が数片確認されている。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての資料としては、

郷原遺跡、山手森谷上分遺跡で11棟の竪穴住居跡と多数の土器が検出されている。

古墳時代になると、各地に古墳が築造されるようになった。曳田地区、築瀬山のふもとにある嶽古墳は全長50メートルという八頭郡内最大級の前方後円墳で、古事記に記された八上姫もしくは八上姫を中心とした地方豪族の墓ではないかと言われている。

嶽古墳から曳田川を1キロさか上った天神原地区には須恵器の窯跡があり、3キロさか上った中井地区には千代川流域では最大となる全長55メートルの中井1号墳があり、古代、この流域が因幡地方でもかなりの勢力をもっていたことが伺われる。また、河原町北部にそびえる町のシンボルである霊石山頂の西側ふもと周辺には、88基の円墳で形成された稲常古墳群が眠っている。

奈良・平安時代の遺跡からは、前田遺跡、郷原遺跡、山手森谷上分遺跡等で多数の掘立柱建物跡や、土師器、須恵器が検出されている。また、下中溝遺跡からは、当時の祭祀に使われたと思われる土馬や獣形土製品が検出されている。



挿図1 周辺遺跡分布図

中世になると、前田遺跡で室町時代の12棟の屋敷跡が検出され、長病に臥せる人の快癒を願ったという呪符や舟形木製品などが出土している。

戦国時代、河原町内北東部の主要な山には砦である山城が築かれていた。羽柴秀吉が因幡平定のおり、陣を築いた所と伝えられているのが、現在お城山展望台「河原城」が建っている丸山城である。当時、秀吉軍に協力した弓河内村の長、北村六郎左衛門は1580年（天正8年）、秀吉からその功を認められ、感状を賜っている。

高福古墳群の南側には高津原城があり、高津原城の尾根沿いの南東部には釜口城があり、山陽地方と因幡地方を結ぶ街道筋の見張り台としての役割であろう面影を残している。高津原城は高福古墳群の南南西方向近くであり、高津原地区の人は高平城とっている。高津原地区に在住する一般研究家の説では、南北朝時代、播磨の赤松氏が智頭郡に攻め入った時、赤松氏が陣取る用瀬の影石城に相對し、現在の八頭郡八東町日下部にあった高平城主である波多野隆平が砦を築いたことから、高平城と呼ぶようになったという。

また、千代川を越えたさらに南側には、枳形城がある。枳形城は八日市と和奈見の中間地にマスの形をしてそびえている枳形山にあって、本丸、二ノ丸、三ノ丸と段々に切りならされており、近郷まれなる構えであった。創立年代は不明だが、福良兵部少輔実滋が1012年（長和元年）ごろ、古城の跡を切り広げ、近郷を領有し在城したという。

枳形城の西、水根地区には水尾城がある。目黒伝之介という国侍が居城し、その近辺はもちろん高草の赤子田の辺をも領有していた。

参考文献 「河原町誌」

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

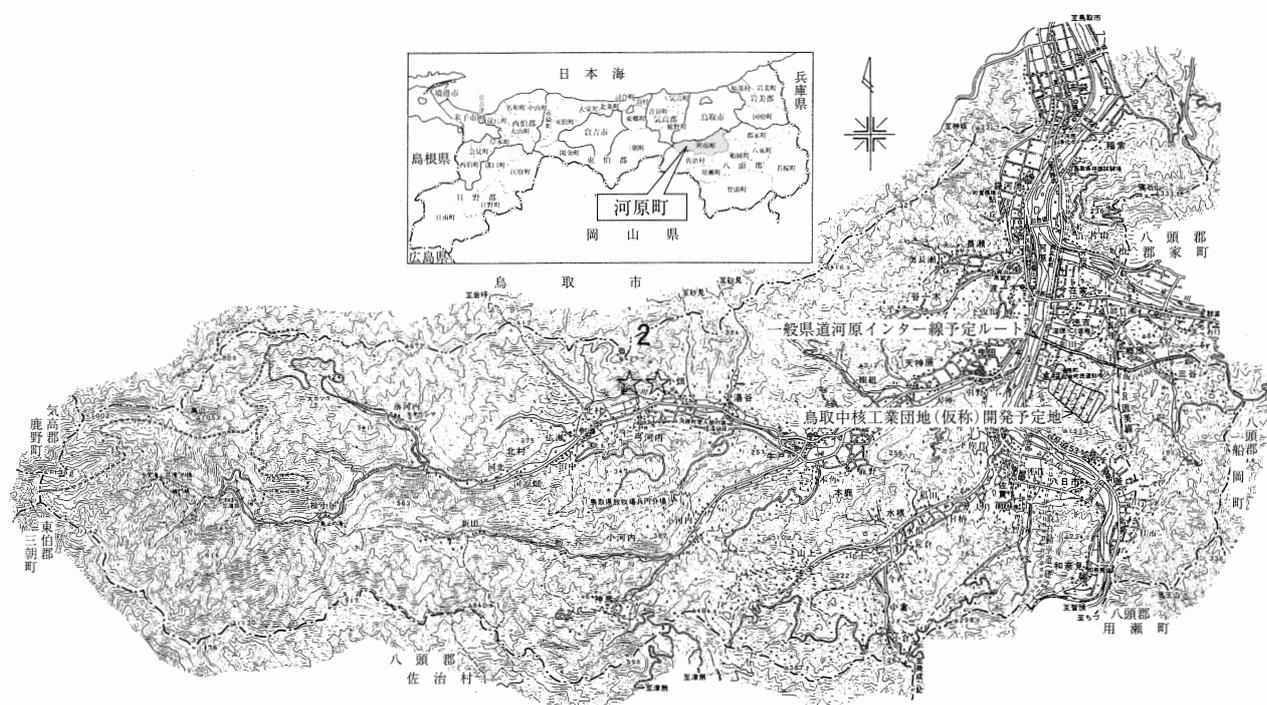
この調査は鳥取中核工業団地（仮称）の開発に伴い、平成13年度に行った試掘調査の追加調査であり、また、一般県道河原インター線の平成15年度着工予定区間にかかる試掘調査である。

平成13年度調査では高福古墳群周辺に23本、山手古墳群周辺に32本、合わせて55本のトレンチを設定し、332平方メートルを調査。19本のトレンチで周溝、土坑、溝状遺構等を確認し、結果として11基の古墳を確認した。その内訳は周知の古墳が4基、新発見の古墳が7基であった。

平成14年度調査では、調査の不足している箇所について鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事の現地指導を受け、高福古墳群一帯の南西部周辺に7本、山手古墳群の北部に8本、地工ノ谷溜め池をへだてた北西部の丘陵地に3本、また、一般県道河原インター線のルート上に1本、合わせて19本のトレンチを設定し、110.1平方メートルの面積で試掘調査を行った。

それぞれ急峻な斜面を上り下りしての作業となった。調査期間は平成14年12月10日から平成15年3月24日までである。

なお、平成13年度に試掘調査した山手8号墳について、これが前方後円墳1基なのか、新発見の円墳と合わせて2基なのか、現地で再検討を加えた。



挿図2 調査区位置図

第2節 トレンチ調査状況

1. 山手古墳群周辺

- TG-1 圃場整備田の東側近くに設定したトレンチである。トレンチ西隣の斜面土中から、平成10年ごろ蓋杯等が出土しており、遺構等の存在が推定されたが、試掘の結果、土師器細片が数点見つかっただけで、遺構は検出されなかった。
- TG-2 過去にTG-1西側で遺物が検出されているため、東側に南北に広がる山中から遺物の転落があったのではないかという観点で、山の西側斜面にトレンチを設定した。TG-2では、遺構、遺物とも検出されなかった。
- TG-3 人工的な切りならしの痕跡があると考えられるが、性格は不明である。遺物はなし。
- TG-4 TG-3の南側に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- TG-5 13年度試掘調査でのTE-8のすぐ東側に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- TG-6 TG-2からTG-5までの設定をした尾根のすぐ北側にある尾根部分には、トレンチを2本設定した。TG-6では遺構、遺物とも検出されなかった。
- TG-7 遺構、遺物とも検出されなかった。
- TE-7 13年度試掘調査でのTE-7である。既に土坑状の落ち込みを確認していたが、サブトレンチを入れ、調査した。昨年度に引き続き、遺物は検出されなかった。
- TH-1 圃場整備田をはさんで、TG群の西側にあるこんもりとした台地状地形である。TH-1では、地表から50センチ位の地点で須恵器片が検出されたが、遺構は検出されなかった。
- TH-2 TH-1から西方へ設定したトレンチ。20センチ前後のピットが4箇所検出されたが、遺物が検出されなかったため、その性格は不明である。
- TH-3 台地上地形の先端部が、一部平らに掘り下げられたような場所である。約60センチ幅の細長いトレンチ設定であったが、ここから竪穴住居の焼けた屋根土と考えられる焼土を検出した。また遺物は、地表から50センチ地点で弥生時代のものと推定される石鏃2点を検出し、そのほか土師器片、須恵器片を検出した。
- TK-1 一般県道河原インター線予定ルート地内に設定したトレンチ。町道開設に伴って盛り土がしてあるため、盛り土のない地形を確認してトレンチを設定した。調査地は以前田んぼであった所であり、地表近くで陶器片が検出されたが、耕土は運ばれたものであると考えられる。

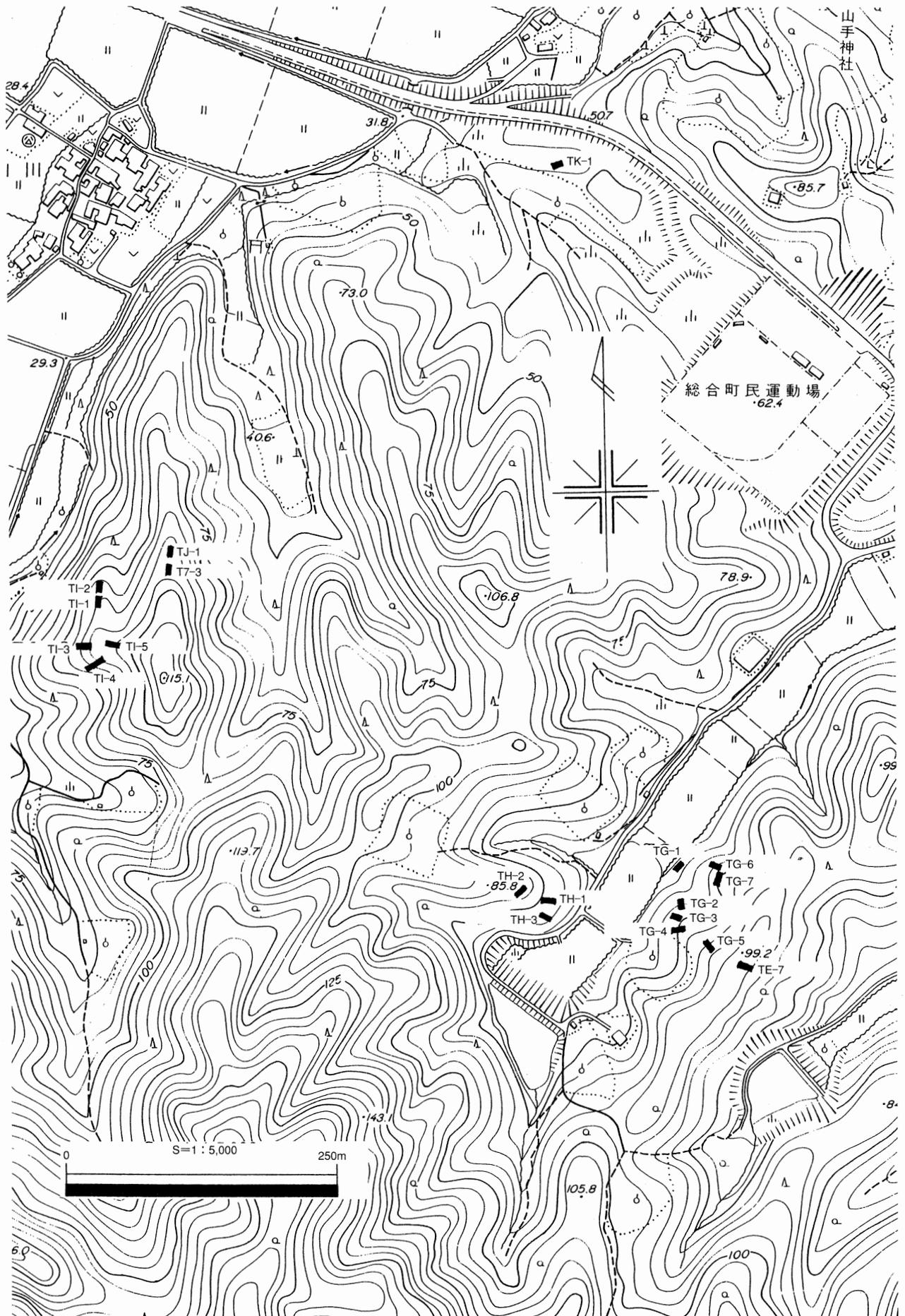
2. 高福古墳群周辺

- TI-1 13年度の調査箇所である尾根山頂部から東に少し下がった所に台地状の地形が広がっており、必要と思われる箇所へトレンチ設定した。TI-1は遺構、遺物とも検出されなかった。
- TI-2 TI-1の2メートル南に設定したトレンチ。ほとんど岩で占められ、掘り下げられなかった。
- TI-3 郭状の平地があったが、遺構、遺物とも検出されなかった。
- TI-4 長い緩斜面に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- TI-5 TI-3と同じような地形であった。遺構、遺物とも検出されなかった。
- TJ-1 かなり広い台地状の地形が、急斜面に展開する地点に設定したトレンチ。ここで、土師器細片が地表近くで多く検出されたため、慎重に掘り下げたところ、長さ約50センチの土器棺が検出さ

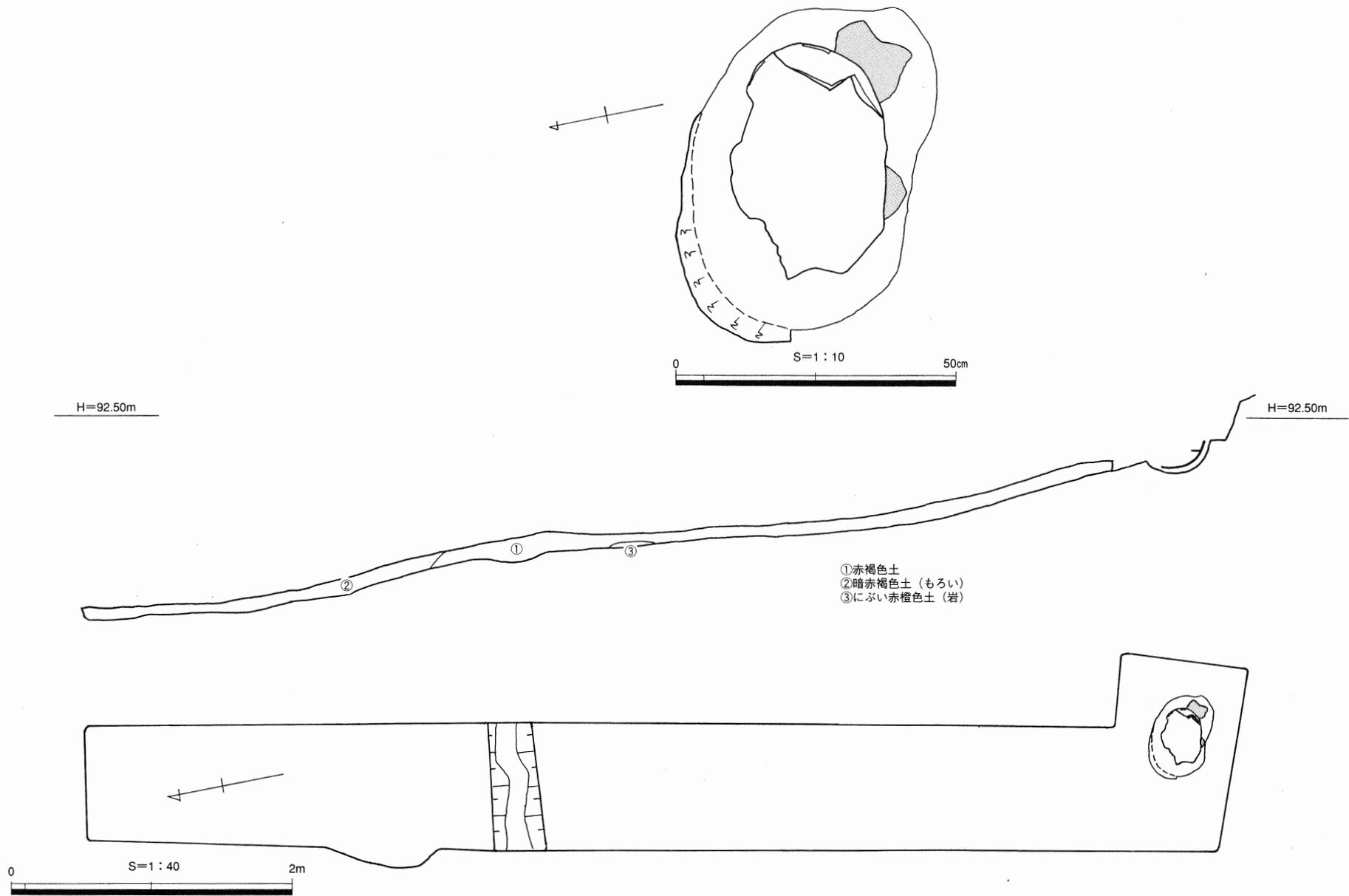
れた。土器棺は明青灰色の粘土によって目張りがなされており、土器が割れたであろう箇所を外側から土器が当ててあった。また、土器棺の斜面下方には溝も検出されたが、かなり削られており、その性格は不明である。

区分	トレンチ番号	遺 構	遺 物	規 模
				幅(メートル)×長さ(メートル)
山 手 古 墳 群	TG-1	な し	土 師 器	1.5×4.9
	TG-2	な し	な し	0.9×2.5
	TG-3	な し	な し	1.0×4.4
	TG-4	な し	な し	1.1×3.6
	TG-5	な し	な し	1.3×2.9
	TG-6	な し	な し	1.2×2.4
	TG-7	な し	な し	1.2×4.3
	TE-7	な し	な し	1.2×2.1
	TH-1	な し	須 恵 器	1.4×5.6
	TH-2	ピ ッ ト	な し	1.2×5.65
	TH-3	豎 穴 住 居	石 鏃・土 師 器・須 恵 器	0.6×4.95
	TK-1	な し	な し	1.8×7.7
高 福 古 墳 群	TI-1	な し	な し	1.05×5.4
	TI-2	な し	な し	1.1×3.5
	TI-3	な し	な し	1.0×5.05
	TI-4	な し	な し	1.2×8.3
	TI-5	な し	な し	1.1×6.7
	TJ-1	古 墳	土 器 棺	0.9×8.1
	T7-3	な し	な し	0.9×8.0

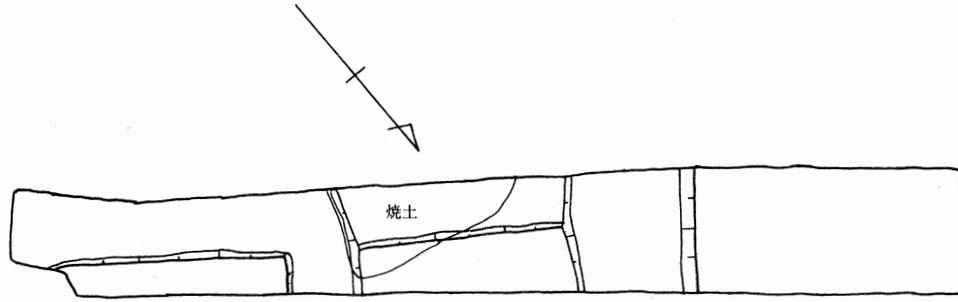
挿表1 山手古墳群・高福古墳群周辺トレンチ一覧表



挿図3 山手古墳群・高福古墳群周辺トレンチ配置図

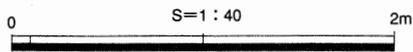
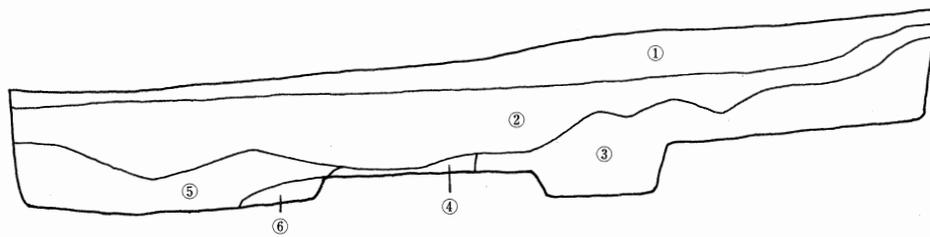


挿図4 高福古墳群TJ-1土器棺



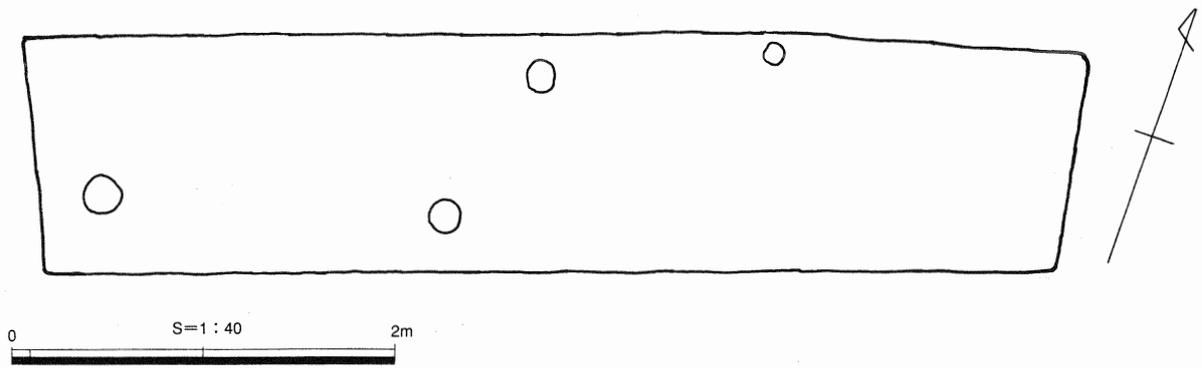
H=67.50

H=67.50

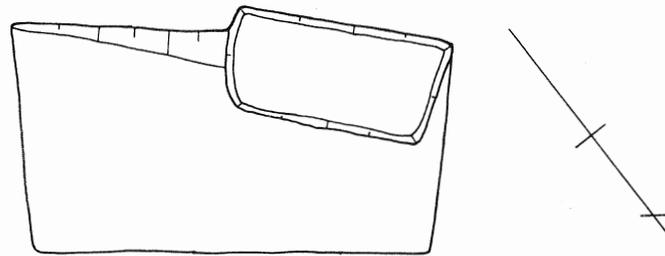


- ①暗赤褐色土 (もろい)
- ②暗赤褐色土
- ③赤褐色土
- ④にぶい赤褐色土 (大量の明赤褐色粒と炭が混じる)
- ⑤暗赤褐色土 (炭が混じる)
- ⑥暗赤褐色土 (少量の明赤褐色粒と炭が混じる)

挿図5 山手古墳群TH-3 竪穴住居跡

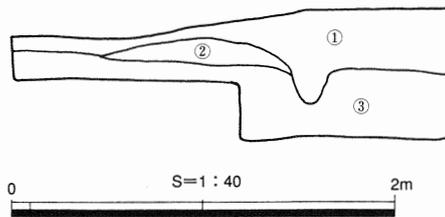


挿図6 山手古墳群TH-2ピット



H=95.00

H=95.00



- ①暗赤褐色土
- ②にふい赤褐色土
- ③にふい赤褐色土(大量の赤色土粒・岩が混じる)

挿図7 山手古墳群TE-7南壁土層断面図及び平面図

第4章 ま と め

鳥取中核工業団地（仮称）という大規模な工業団地計画と、一般県道河原インター線整備計画に基づき行った試掘調査で、平成13年度の調査を補完する調査であり、昨年度の調査結果から、さらに遺構等の発見が予想された。

調査の結果、高福集落の南東にある高福古墳群では、6基連なる古墳群の南に新たに古墳1基を発見した。遺構として全長約50センチの土器棺、溝を検出したが、土器棺は小さなものであり、埋葬者は子どもである可能性が高い。土器棺は弥生後期から古墳時代前期に作られたもので、土器の上部が削られ、底部が残った状態であった。

また、土器棺が見つかった新発見の古墳から南東方向にちょうど500メートル地点では、弥生時代の竪穴住居跡が検出された。トレンチ内の焼土を検討したところ、土屋根の土が焼失に伴って落下したものと考えられる。遺物であるサヌカイトの矢じり2個も弥生時代のものである。

確かな住居跡があったということで、近くに当時の水田や水場がある可能性があり、今後開発が進められる場合は、東側に広がる谷の水田の試掘調査が必要であり、その結果によっては本調査等の対応も必要となってくる。

なお、平成14年度に試掘調査を実施した山手8号墳周辺には、開発予定区域外にある山手11号墳を除いて5基の古墳を確認している。うち山手8号墳は、縦長盛り土の北側、中央及び西側に周溝が確認できたため、古墳が1基なのか2基なのか検討したところ、中央と西側の周溝が四角形で結ばれる一つの周溝であると確認できたため、北側の周溝は別固体であり、8号墳とは別にもう1基あることが分かった。

13年度、14年度と2年間かけた試掘調査であったが、千代川近くの恵まれた地形にあるため古代から多くの人々が住んだ場所であり、古墳等が数多く見つかった調査であった。

今後、開発計画が進んだ場合は、適切な調査、記録が必要であるとともに、貴重な古墳群等の保存という視点も踏まえて、開発と保存の両立を図る必要がある。

(a : 口径, b : 器高, c : 底径)

遺物番号	遺跡名	トレンチ名	器種	法量cm	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	山手8号墳	A1	甕	a — b 6.4 c —	大甕の口縁部で、短く立ち上がる。	外面に、細かい波状紋あり。内面は横ナデ。	密	良	外) 黒褐色 内) 灰黄褐色	
Po2	山手10号墳	A5	坏蓋	a 12.1 b 4.1 c —	天井部から口縁部まで内湾しながら下り、端部は凸面を持つ。天井部はやや厚め。	内外面回転ナデ後指整形。外面天井部に傷。	密(3mm以下の砂粒をやや多く含む)	やや不良	外) 黄灰色 内) 灰白色	
Po3	山手10号墳	A5	坏身	a 10.1 b 4.1 c —	立ち上がりは内傾し、端部は丸みを持つ。底部はやや厚く、丸みを帯びている。受け部は体部から伸びて、外上方に短く納める。	内外面回転ナデ後、内面指整形。外面底部に幅1cm、長さ5cmに渡って線刻の帯。	密(4mm以下の砂粒をやや多く含む)	やや不良	内外面とも灰白色	
Po4	山手10号墳	A5	坏身	a 10.6 b 4.1 c —	立ち上がりは内傾し、端部は凸面を持つ。底部は平坦。受け部は体部から伸びて、外上方に短く納める。	内外面回転ナデ後、内面指整形。	密(5mm以下の砂粒をやや多く含む)	良	内外面とも灰色	
Po5	山手12号墳	B2	坏蓋	a — b 4.7 c —	口縁部まではほぼ垂直に下り、端部は凸面を持つ。	内外面回転ナデ。	密	良	内外面とも、 にぶい黄褐色	
Po6	山手12号墳	B2	高坏	a 8 b 5.1 c —	立ち上がりは内傾し、端部は薄い。底部は平坦。受け部は体部から伸びて、外上方に短く納める。	内外面回転ナデ。	密	良	内外面とも褐灰色	
Po7	山手12号墳	B2	横瓶	a 12 b 18.7 c —	口縁部は頸部より立ち上がったあと外はなし、端部は外傾する面をもつ。	外) タタキ後カキ目。自然軸が付着する。 内) タタキ当て具アト。当て具は円形である。	密	良	外) 灰黄褐色 内) にぶい黄褐色	
Po8	高福1号墳	3-2	甕	a 22 b 13.5 c —	口縁部は頸部より外はなしした後、垂直に立ち上がり、端部は肥厚。	風化著しい	密	やや不良	内外面とも橙色	
Po9	高福1号墳	3-2	砥石	全長 20.2 最大幅 7.1 最大厚 4.4	やや扁平で一面に研磨面。別面にも研磨したようなあとや刃のあとがある。	成形時の工具痕が鮮明に残る	—	—	浅黄橙色	重量 813.5g
Po10	高福2号墳	1-1	器台 台部	a — b 5.7 c —	鼓形器台台部。端部は外反しながら開く。	外) 縦ミガキ。横ナデ。下部に沈線が認められる。 内) ケズリ。	粗1~2mmの砂粒が混じる	良	外) 橙色 内) にぶい橙色	
Po11	高福2号墳	1-1	器台 台部	a — b 5 c —	鼓形器台台部。端部は外反しながら開く。	外) 横ナデ。風化著しい。 内) ケズリ。	粗1~2mmの砂粒が混じる	良	外) 橙色 内) にぶい橙色	
Po12	高福2号墳	1-1	器台 受部	a 18.8 b 6.5 c —	鼓形器台の口縁部片。受部はやや外反して開き、端部は丸みを持つ。	外) 風化著しい。横ナデ。 内) ケズリ。	粗1~2mmの砂粒が混じる	良	外) 橙色 内) にぶい橙色	
Po13	山手所在遺跡	H1	坏	a 12 b 3.5 c 8.6	底部から斜めに立ち上がる。底部に高台が付く。	内外面回転ナデ。	密	良	内外面とも褐灰色	

挿表2 出土遺物観察表

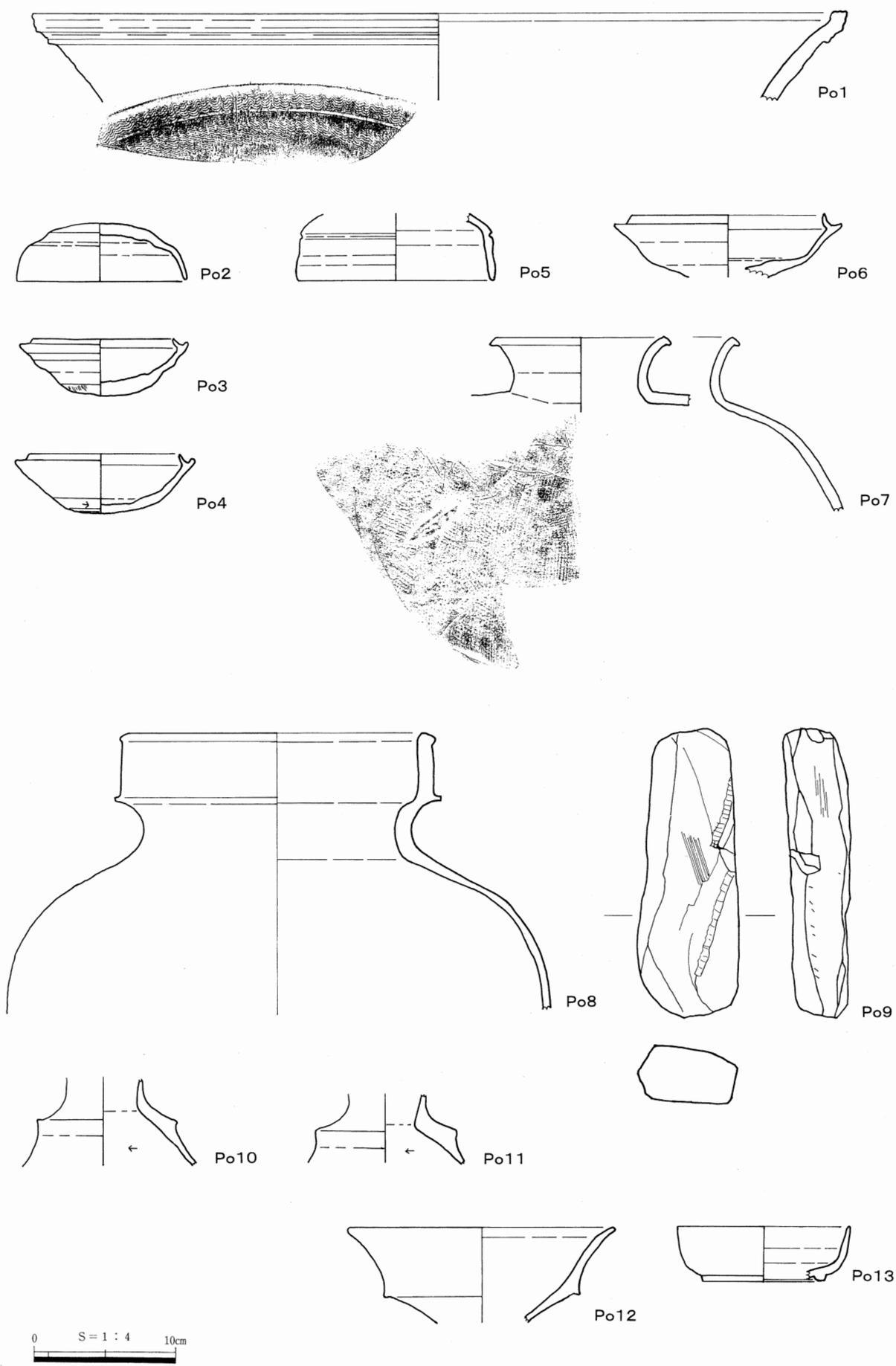


插图 8 出土遺物実測図

圖 版



TG-1 完掘状況



TG-2 完掘状況



TG-3 完掘状況



TG-4 完掘状況



TG-5 完掘状況



TG-6 完掘状況



TG-7 完掘状況



TE-7 完掘状況



TH-1 完掘状况



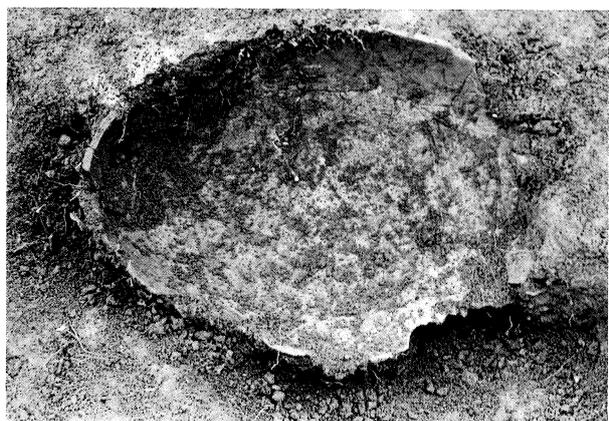
TH-2 完掘状况



TH-3 完掘状况



TK-1 完掘状况



TJ-1 土器棺出土状况



TJ-1 完掘状况



Po 1



Po 2



Po 3



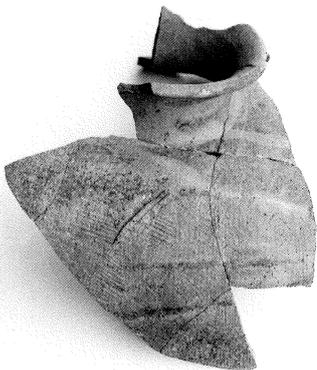
Po 4



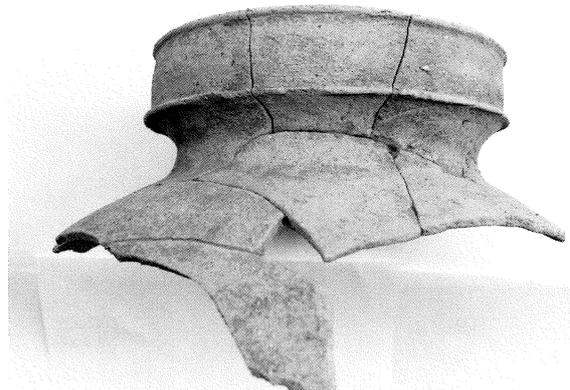
Po 5



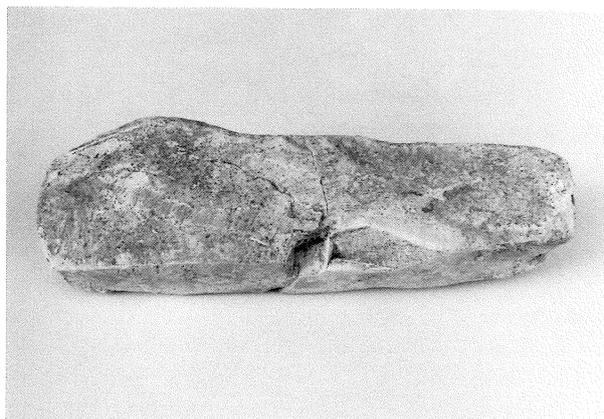
Po 6



Po 7



Po 8



Po 9



Po 10



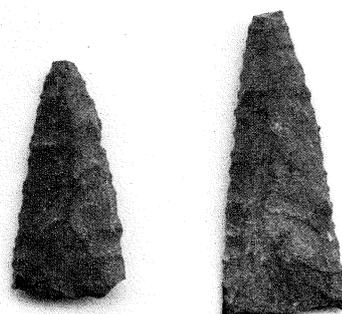
Po 11



Po 12



Po 13



TH-3 出土石鏃

報 告 書 抄 録

ふりがな	かわはらちょうないいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	河原町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	鳥取中核工業団地（仮称）整備事業及び一般県道河原インター線整備事業に伴う試掘調査							
巻次								
シリーズ名	河原町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	15集							
編著者名	中道秀俊							
編集機関	河原町教育委員会							
所在地	680-1221 鳥取県河原町大字渡一木277番地							
発行年月日	西暦 2003年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまてぢくのたに 山手地ノ谷 かみおんいせき 上分遺跡	とっとりけんやぶぐん 鳥取県八頭郡 かわはらちょうおおあざかみ 河原町大字山手	31323	227 ほか	35度22分55秒	134度12分47秒	2002.12.10 ～2003.3.24		鳥取中核工業団地 （仮称）整備事業 一般県道河原インター線整備事業
たかふくこぶんぐん 高福古墳群	とっとりけんやぶぐん 鳥取県八頭郡 かわはらちょうおおあざたかふく 河原町大字高福	31323	228 ほか	35度23分13秒	134度12分32秒	2002.12.19 ～2003.3.10		鳥取中核工業団地 （仮称）整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
山手地ノ谷 上分遺跡	集落	弥生	ピット 土坑 竪穴住居	石鏃、土師器、須恵器			竪穴住居跡の焼土は土屋根の土である	
高福古墳群	古墳	弥生古墳	土器棺 溝	土器棺			埋葬者は子どもである可能性が高い	

河原町埋蔵文化財調査報告書 第15集

鳥取県八頭郡河原町

河原町内遺跡発掘調査報告書

発行 2003年3月24日

編集 河原町教育委員会

〒680-1221

鳥取県八頭郡河原町大字渡一木277番地

電話 (0858) 76-3122

発行者 河原町教育委員会

印刷 勝美印刷株式会社